

戦後強制連行に係る労苦

新潟県 山本幸吉

昭和十六（一九四一）年十二月一日、十六年現役兵として徴集、甲種合格で家を出る時、玄關で杯を割って勇躍出発。新潟県新発田連隊に入隊した。

十二月八日広島県宇品港より伝馬船で本船に移る時、初年兵受領下士官曰く「本八日未明、米英と戦闘状態に入れり、お前達、内地の山野をよく見ていけ」と意気高揚する。朝鮮釜山港經由、中国北京西北方問頭講にて教育隊で六カ月教育中、支那人は面子を重んじる民族であるから、注意するよう言われました。

教育終了後、万里の長城近くの、標高八百五十メートルの第一線に配置される。当面の敵は第八路軍七団長張成加・九団長宛でした。

昭和十七年六月ごろ、敵の夜襲の朝に鉄条網の

側に敵の慰問袋が有り、中を見ると母親が子供を抱いて泣いている姿を染め抜いたハンカチと、嫌戦気分になるビラがあり、将校商売、下士官道楽、兵隊ばかりが御奉公と書いてありました。

昭和十七年八月〜十二月まで第十五旅団司令部の衛兵要員として西長安街鉄路学院を接収した司令部に勤務していた。宿舎は東公民巷の野戦鉄道司令部で、宿舎の左隣は正金銀行、右隣は日本大使館、道路の前はソ連大使館、その右はイギリス大使館でした。

昭和十八年六月独立混成旅団から師団編成になり、六十三師団南の保定に移動。

昭和十八年九月から十二月まで、北異西作戰（第十号）が有り、分隊長曰く「この作戰は厳しく分隊の半数は戦死するかも知れないから覚悟せよ」と。結果は二人の負傷ですみました。保定陸軍病院唐皇靈山鎮に移動。

昭和十九年一月帰隊中マラリアになり一カ月入院しました。十九年十二月より二十年一月旅団作

戦があり、敵も包囲されると兵器を分解して手榴弾で自爆死する。敵ながら天晴れな戦闘を見ました。

作戦途中、米、英の戦闘を教育されますが、第一線ですから教育演習中に敵の攻撃があると演習の中止をせざるを得なくなります。米、英の戦闘の作戦は兵を殺さず機動有利に展開するやり方で、勝ち目のない戦いです。ましてや当時の私達の装備は丙装備です。警備地壺山鎮を他部隊と交替しました。

その後、敵の正面攻撃ではなく地下坑道を掘り、部隊は全滅したそうです。米、英戦闘教育の仕上げを兼ねて保定と北京の間に燕京道作戦を展開し、終了後、第五軍牛島満中將の指揮下に入り沖繩陥落の報により満州四平省金包屯に移動、設営小隊として先に朝鮮開拓団が開拓に失敗した所で蒙古人が入っておりました。米、英に対する作戦演習をやっている時に遊撃戦法基幹要員としての命令でうんざりしましたが仕方ありません。各中隊下

士官一人、教官五人、佐官級で教育内容はロシア語、支那語、蒙古語でした。

拳銃弾五十発と支那服を受領、中隊長に報告に金包屯駅に行くと、直に帰隊せよの電話連絡。ソ連の突如の侵略に作戦編成第二小隊第二分隊長にされる。

いよいよ来るものが来たと言う感じ。八月十四日金包屯出発、四平街より南下。十五日夜、ある駅に着く。

北上する部隊、南下する部隊、一般邦人で大混乱。十六日の朝、奉天（瀋陽）北飛行場の引込線に入ると戦争が終ったという話。負けたらしいということと雰囲気がおかしくなって来ました。文官屯の関東軍兵器廠で武装解除。奉天大学収容所に入る女性が頭を丸坊主にした軍服姿を多数見かける。

九月十四日、奉天駅を出発、ソ連監視兵は刑務所出の囚人が多く、程度が悪いから注意するようにと指示があった。

ダモイダモイと北へ、満州北端国境の街、黒河に着く。渡河し、対岸のブラゴエシチエンスクより一路シベリア鉄道を西進し、イルクーツク州マカリオ収容所に入る。元ドイツ兵捕虜収容所と聞く。

十一月三日裏山に連行され、縦一メートル七十、横七十センチ、深さ一メートルの穴を掘らせられました。死者の墓穴でした。作業は乾電池の製造で、最初は屋内作業でしたが、その後屋外労働に回され、チレムホーボ炭鉱で石炭の積み下ろし作業中、貨車の底板と車輪の間に挟まれ右腕の付根から骨折しジマ病院に入院。ソリに乗せられ街の中を通る時、ソ連の子供がヤボンスキー、腹切り、サムライと言いながら付いて来ました。病院に着くと右腕の骨の出た穴にマキユロを一回付けただけで、一カ月後退院するまで何の治療もありませんでした。

働かざる者食うべからずで、黒パンも半分ですし、骨が治り、付いたら退院する気持ちでおります。

したので、ソ連の医者アレキサンドリア・ドクトルにラポート、ハラシヨールと言って退院しました。元の収容所には帰れず、苦楽生死を共にした戦友には会えず残念でしたが、ジマ収容所第二航空軍で十三飛大、対空無線飛行連隊、野戦航空廠の方々には心遣いをして頂き、八家軍医（姫路病院長）、二宮軍医には大変お世話になりました。

二十二年一月ジマ収容所出発、マルタで輸送編成され、四月シベリア鉄道を東に向ってバイカル湖を通過する時に湖面の上を自動車走っており、ナホトカに着くと思教育もあり、赤旗の唄、インターナショナルの歌もあり、いよいよ日本船「大郁丸」に乗船、看護婦さんから「御苦労様でした」と言われると感涙、感動、泣きました。

舞鶴湾は大小の島々が点在、青々と箱庭のように美しく感じられました。

五月七日上陸、援護局に戦友の遺品を届出。

五月十一日、我が家の敷居をまたぐ。後日遺品

の父親が当時の状況確認に来訪される。親はキツとした顔で帰られ、運命の別れ道、何とも申しようがありませんでした。親子の愛情、どれほど帰国を待ち望んでおられたか、つくづく感じられます。残された人生もあとわずかとなりました。日本人に生れて私は良かったと思います。

本籍 新潟県

現住所 新潟県三条市南四日町

私の抑留生活

石川県 今西三郎

私は抑留中入院しまして、退院後ほとんど病院勤務をしておりました。その体験をお話したいと思います。

日本へ帰ると言っただまされて、着いたところがシベリア。人影も何もない大荒野の囚人流刑地でした。だまされたショックは大きいですね。今後どうなるのか、大変心配もしましたし、またとにかく寒いのと腹が減るのにはまいりました。

一日の食事は、コーリヤンを原料とした赤いパン三〇〇グラム、自分たちは二〇〇ぐらいしかありませんでした。実も何もないスープで、とてもそれでは食べた気がしない。それで栄養失調になって、ばたばた倒れていきました。

作業へ出ていくにも、足が上がりません。やっと収直ぐつまずいて足が上がりません。やっと収